地産地匠アワード 二〇二四

つなぐデザイン、
芽吹く工芸

地産地匠

LOCAL FACTORY × LOCAL DESIGNER

主催・運営

株式会社中川政七商店
〒六三〇・八一四四
奈良市東九条町一一一二・一
https://nakagawa-masashichi.jp/

「地産地匠」＝地元生産×地元意匠。
日本のものづくりの歴史を未来に繋げる
新しいスタンダードは、産地から生まれる。

今、地域に拠点を置き、地域のものづくりと
関わるデザイナーの活躍が増す中、
その取り組みを深める新たなアワードが誕生します。
地域に根ざすメーカーと、
地域を舞台に活動するデザイナーがタッグを組み、
生み出したプロダクトを募集するコンペティション。
それが「地産地匠アワード」です。

メーカーとデザイナーのタッグに光をあてる

メーカーが持つ高い技術や、その地域ならではの素材。デザイナーの持つアイデアや生活者としての目線、そして美意識。同じ地域で、同じ風土と暮らしを共有するデザイナーとメーカーが協働してこそ新しいスタンダードとなるプロダクトが生まれると考え、2者合同チームによる応募を対象とします。

風土や手仕事が活かされたプロダクトを募集

募集するのは、生活の中の衣・食・住に関わるプロダクト。産地で育まれる素材や、その土地の暮らしの中で育まれてきた技術・文化・風習を取り入れていることを評価します。一次審査は書類審査、二次審査はプロトタイプおよびプレゼンテーションでの対面審査を行います。

すべての受賞商品を責任を持って販路支援

継続的な生産と販売を前提とし、産地のメーカーやデザイナーに利益が還元される仕組みをつくります。合同展示会「大日本市」への出展サポートや小売店への卸販売をはじめ、中川政七商店直営店での販売、さらに旗艦店では受賞メーカー・デザイナーを特集する企画展を実施。作られ続けること、使われ続けること、ものづくりが循環することこそが、工芸を未来へ繋いでいくと考えています。

-めぶく-／猪苗代漆林計画

時を超える漆に未来への祈りを託して

めぶく弁当

飯椀、汁椀、おかず皿が三段重ねになった会津漆器のお弁当箱。高台裏には「漆の種」が埋め込まれています。器の役目が終わったら、これを土に埋めてください。未来の誰かが種と共に発見し、再び漆の木が「めぶく」かもしれません。

会津漆器
（福島県 猪苗代地域）

Maker

漆とロック株式会社　漆器職人（塗師・漆掻き）
貝沼 航　平井 岳

Designer

Helvetica Design株式会社
佐藤 哲也

Comment

「漆器を土に還す」という行為に、祭礼的な祈りと遊び心を添えて、その思想とプロセスをみんなで楽しめないか。そしてその先に、漆の木を守り育てるコミュニティの繋がりになるような漆器が作れないか。そんな長年の構想を発表する場をずっと考えてきました。モノで溢れる現代、新しい物を生み出すこと以上に、物の終わりのデザイン、つまり〝物の命の仕舞い方・願いの託し方〟を考えてみることが、私たちにとって より大切なことかもしれません。そんな私たちのメッセージを受け止めてくださり、ありがとうございます。

詳しくはこちら

Story

縄文遺跡から漆製品が出土しているように、防腐・耐水性に優れた漆で保護された器は、時を超えるタイムカプセルです。漆の国内育成は危機に瀕していますが、「種」さえ残せばウルシを未来に繋ぐことができるかもしれない。そんな祈りを込めて、漆の種を埋め込んだうつわを作りました。漆器ならではの軽さと持ち心地、漆本来の美しい飴色、木目が浮かび上がる佇まい。コンパクトだけどたっぷり入る、どこか愛らしい、現代に馴染む形になっています。このプロダクトのベースとなる「猪苗代漆林計画」では、漆器づくりの原料となる漆の木の植栽・育成活動に取り組んでいます。いつの日か、このお弁当箱を持ってみんなで漆の林で集えたら。そんなことをイメージしながらデザインしました。

1

2

3

(1)漆の木から塗料を採取する「漆掻き」の様子(2)「信玄弁当」と呼ばれる3つ重ねのお弁当箱がモチーフ。木地にはミズメザクラの天然木を用い、漆掻きから塗りまでを一人の職人が担う(3)蓋も兼ねる汁椀の高台部分に種が埋め込まれている

〝タイムカプセル〟のような漆器をつくる

漆という素材や漆器の面白さ、可能性に惚れ込み、会津地方を中心に約20年にも渡ってその魅力を伝え広げる活動を続けてきた貝沼さん。特にこの2年間は「猪苗代漆林計画」というプロジェクトも開始し、原料である樹液を取るために漆の木を育てるということにも向き合ってきました。

「育てるところから漆の木と対峙したこの2年間で、改めて、この命をどうやって繋いでいこうかと考えました。漆の木というのは、人が手をかけてあげないと育たない木で、何もしないと枯れてしまいます。種を植えて、育てて、樹液を採って、また種を植えて。そういう営みを日本人が縄文時代から繰り返してきたからこそ、漆の木と漆文化が今も残っている。この先、漆を植えて育てることをやめてしまえば、いずれ漆文化は途絶えてしまいます。でも種さえ残っていれば、遠い未来の人が発掘して、そこから漆を繋いでくれるかもしれない。それは、あくまでも遊び心というか、本当にその種が発芽することを期待しているというよりも、種を埋め込むことで、未来に想いを託す。そんなタイムカプセルのようなうつわを作りたいなと思ったんです」

〝漆の種を埋め込んだうつわ〟。その実現のために貝沼さんは、猪苗代町在住の塗師・平井岳さんに声を掛けました。

「最初はびっくりしました。種を埋めたうつわなんて一度も作ったことないよって(笑)。でも、未来へ漆をつないでいくストーリーは凄く面白いし、実現できれば確かにいい。種が綺麗に見えるように塗り方も色々と試行錯誤したりして、楽しかったですね」(平井)

「平井さんは漆塗りの職人でありながら、自分で漆自体を採る漆掻きの職人でもある珍しいタイプの作り手さんで、漆林を作る活動でもご一緒しています」(貝沼)

通常、漆器の仕事は分業制で、木を育てる人、漆を採る人、塗る人がそれぞれ分かれていることが一般的です。しかし、木を育てる人が国内にほとんどいないなど、国産漆の供給は危機的な状況にあり、既に国内で流通している漆の大部分は海外産。分業だからといって何もしなければ、いずれ枯渇してしまいます。

「特に会津地方は漆の木がすごく減っていて、毎年どこかに漆の木が残っていないかと山の中を探し回り、どうにか漆掻きをしています。なので、いつかは自分で木を植えないとなと思っていて。貝沼さんと出会って、ようやく植栽活動を始められました。最近、『漆を採ってみたい』という若い人たちが増えてきていて、『一緒に福島で頑張ろう!』と答えたいのに肝心の漆の木が無くて。このままだと資源の取り合いみたいなことになってしまう。でも自分たちで木を育てて資源を増やせられれば、そういった若い人たちも招き入れられるし、僕も次世代に技術を継承していける。そんな想いは強く持っていますね」(平井)

この弁当箱のデザインも、平井さんが考案。洗いやすさや容量も考えながら何度も改良を重ね、どこか愛らしい、現代に馴染む形に仕上がりました。

「漆林が成長していく過程を色々な人たちが見守る中で、たとえば皆で集まって食べられるうつわがいいよねということで、お弁当箱になりました。信玄弁当にすれば、今回のポイントである種も上から見える。このお弁当箱を持って皆でピクニックに来た時にこんな形であれば可愛いなとか、こんなご飯が食べられれば皆満足してくれるかなとか、そんなことをイメージして作りました。漆器って触っちゃいけないイメージが強いのかなと思うんですが、そんなことはないので、ぜひ手に取ってもらいたい。持った時の馴染みやすさや質感を大事にしているので、それを感じていただけると嬉しいです」(平井)

漆器との関係性、長い時間をデザインしていく

「このお弁当箱を迎えてくれる方たちのことを、お客様というよりむしろ仲間だという風に考えていて。その仲間たちとどういう風に長い関係性を築いていくのか。時には修理をしながら大切に弁当箱が使われて、最終的には土に還るまでの長い長い時間のデザインをどう考えていけばいいのか。その探求やコミュニケーションデザインを一緒にやってくれる人として、佐藤さんにお願いをしました。基本はデザイナーさんなんですけど、手を動かすというよりは、人と人の関係とか、世界観を考えるというところを一緒に歩んで下さる。そこが一番魅力的な方だなと思っています」(貝沼)

「今回、僕はデザイナーとして参加はしているものの、なるべくならデザインしない方がいいと思っているんです。このお弁当箱のプロジェクトは、今の時代に漆がどうあるべきか、暮らしと漆の距離感はどうなっていくのか、そんなことを考え直すきっかけになると思っていて。例えば貝沼さんが漆に惹かれたことや、平井さんが自分で漆を採るようになったこと、そういう自然に生まれてきたことを捻じ曲げたり誇張したりせずに、その等身大がより良く見える状態を考えたい。そんなところにデザインがあった方がいいと思っています」(佐藤)

実際の商品の形や機能性といったデザインももちろん大切ですが、それ以上に、使う側の受け取り方、心の在り方をどうやってデザインするのか。佐藤さんが加わったことで、丁寧に対話を重ねながらその部分の考えを深めていくことができたといいます。

「すごく自我の無いデザイナーさんだなというか。本当に暖かく見守っていただいてますよね。その上で、本質的なものをきちんと伝えて、世界を作っていくためのデザインを考えられる方だと思っています」(貝沼)

「それ自体を良いと思えるような社会にしていけるかどうか、というのが、プロダクトが残っていける最大の秘訣です。漆自体が必要とされれば、作る人も増えてくるし、相談事も増えてくる。そういう風に循環のベクトルを変えるというか、そこにタッチしないといけない。今、生活の一番の課題は時間がないことだと思っています。時短で便利なものが良しとされている時代に、時間が作れるようにどうやってライフスタイルを過ごしていくのか。そういった視点があると、漆を使う機会も手にすることができるのかなと」(佐藤)

「時間が無いからこそ、まず思い切って漆器を使ってみるのもいいのかなと思っていて。漆器は決して扱いが難しいわけではないけど、ちゃんと手洗いしてあげたり、拭き上げたりする時間は必要。その中で、木と漆と水に触れて心地よく五感が刺激される感覚を味わったり、経年変化を楽しんだり。そんな充実した時間をもたらしてくれるのかなと」(貝沼)

商品が出来て終わりではなく、購入されて終わりでもない。そこから、貝沼さん達の想いに触れて共感した仲間たちとの関係が始まり、それぞれの人と漆との関係も始まっていきます。

「このお弁当箱を皆さんが迎えてくださってからの時間も本当に楽しみなんです。使い始めた皆さんに会津へ来ていただいて、漆の植樹祭のようなイベントをやってみたり。秋にはお弁当箱を持って集まって、漆林の土地を貸してくれている農家さんのお米でご飯を食べたり。平井さんの工房や漆掻きの様子を見ていただくツアーや製作体験のワークショップとか。会津や漆をさらに知って、楽しんでいただけるといいなと思っています」(貝沼)

メーカー　貝沼航さん(漆とロック)
漆器職人　平井岳さん(塗師・漆掻き)
デザイナー　佐藤哲也さん(Helvetica Design)

インタビュー全文
こちらから
お読みいただけます

GRAND PRIX グランプリ

支障木プロジェクト

街に生きた木々から、新たな産地をつくる

わっぱのケース・バスケット

暮らしの〝支障〟となり、切らざるを得なくなった〝支障木（ししょうぼく）〟と呼ばれる材を用いたプロダクト。街の中に生えていた木々それぞれの節目や傷すらも、木の生命を感じられる唯一無二の個性として活かしました。

木工産業
（静岡県）

Maker

株式会社iwakagu
岩﨑 翔

Designer

OTHER DESIGN
西田 悠真

Comment

地域木材の中で「支障木」に着目し、ここまで4年ほどの月日が経ちました。静岡の関係者・職人たちのご協力に感謝しています。気候変動による倒木や管理できない木々、支障木は静岡地域だけでなく全国にある課題です。この支障ある木々を「魅力」として伝え、価値があるものと認識してもらえるよう活動を続けていきます。私たちの活動をきっかけに、全国で新たな解決方法や協業が起こることを願っています。また、地方ではものづくりの担い手が減っています。技術や知識などの伝え方にも責任を持ち、若い世代に継承をしていきたいと思います。

詳しくはこちら

Story

木々に関する産業が集まる静岡。木と街の距離が近いため、人が関わらないことで起こる不健康な樹木の問題を耳にします。管理しきれず、倒木の危険がある「暮らしに近い支障木」。木工から解決できそうなこの課題に着目しました。支障木は突発的な伐採と少量での処理を求められます。反りやうねりがあり、均一な機械加工には不向きで、一般的にはチップや廃棄物になります。支障木プロジェクトでは、不均質さを個性として捉えなおし、均一な木工品にはない魅力に変換しています。木工品をつくり、使い手に手渡せる立場の木工房から、責任を持って適切に使うことで問題解決をしたいと考えています。

(1)街から近い里山で採れた支障木。隣接する構造物を壊してしまう恐れがあり伐採された(2)プロジェクトには木こりをはじめ製材所や家具工場も参加。木工産業が集まる静岡だからこそ実現できた取り組み(3)静岡の伝統工芸「めんば」職人による曲げ木加工で薄く軽やかに仕上げる

トリプル・オウ

創業一四七年の技術がひらく、刺繍の新たな可能性

刺繍ポシェット

持ち手以外をすべて刺繍糸で構成した、刺繍ならではの透け感としなやかさが特徴のバッグ。普段使いでも繊細なフォルムを保てるように構造を工夫し、ファッションの幅を広げながら、日本の刺繍技術を身近に感じられる品です。

桐生織物・刺繍
（群馬県 桐生市）

Maker
株式会社笠盛
野村 文子

Designer
株式会社笠盛
片倉 洋一

Comment

このポシェットは、日本の刺繍技術を多くの人に届けたいとの思いで生まれました。その為、完成して終わりではなく使われて初めて価値のあるものになります。技術としてはまだまだ進化途中です。この受賞をきっかけに使い手の意見と刺繍の可能性を組み合わせて、ニーズに合った技術開発を続けて参りたいと思います。そうした先に、刺繍や織物の産地「桐生」が、私たちのプロダクトを通して世界中の人に親しまれる未来を期待しています。

詳しくはこちら

Story

刺繍加工は安価に出来る海外工場に流れ、桐生を含め国内の刺繍メーカーは年々少なくなっています。刺繍の新しい表現を生み出し、刺繍が人々の生活により身近になることで、日本の刺繍技術を広めたい。そんな想いから刺繍のみで出来るプロダクトの開発に着手しました。通常刺繍は布などの土台となるものに縫いつけて形を作ることが一般的。笠盛のオリジナル刺繍であるカサモリレースは、土台を使わず糸の重なりだけで形を作る技術で、刺繍の魅力がダイレクトに伝わります。今回その技術を応用してバッグを作りました。絹織物の産地〝桐生〟の着物文化から発想し、「平面から立体に変わる」テキスタイルで暮らしにフィットするプロダクトを考えました。

(1)かつて絹織物の産地として栄えた桐生の風景を紋様に落とし込んだ(2)水に溶ける紙の上に刺繍をした後、紙だけを溶かし刺繍だけを残す独自技術「カサモリレース」(3)刺繍機器を緻密に動かすプログラミング技術と、一つひとつ人の目で確かめる手仕事が合わさって作られる

越前瓦器

屋根から食卓へ、現代の暮らしに生まれ変わった瓦

ECHIZEN GAKI

越前瓦の素材と技術を、器に転用したテーブルウェア。ゆらぎのある土の表情が料理を引き立てつつ、雨風や雪にも耐える瓦ならではの丈夫さで電子レンジや食洗機にも対応。現代の暮らしのなかに、瓦が新たな風景をつくります。

越前瓦
（福井県 越前市）

Maker

株式会社越前セラミカ
石山 享史

Designer

高橋孝治デザイン事務所
高橋 孝治

Producer

合同会社ツギ
新山 直広

Comment

越前瓦の魅力を発信する機会をいただき、大きな喜びを感じています。自然の原料を活かし、瓦製造の技術で生み出した越前瓦器は、原料や窯の雰囲気で一つひとつが違う表情を出す製品に仕上がりました。全国の食卓を越前瓦器が彩ることを楽しみにしています。（石山）

日用品は使われてこそ。発売や当コンペでの受賞を経てようやくスタートラインに立てると思っています。量産して判明する課題の解決にもしっかり伴走するとともに、好評を得たなら、新商品開発や他の瓦産地との協同も実現していきたいです。（高橋）

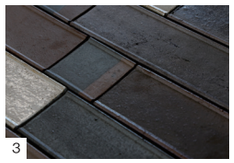
詳しくは
こちら

Story

越前セラミカの精土工場では、土から大きな砂利を除き、灰を混ぜるだけのシンプルな原料処理を行っています。そのおおらかな土づくりには、いま流通している量産品にはない本来の焼きものらしさがあるのではないか？と思ったのがアイデアの中心となり、越前の風土に育まれた土の味と、瓦の成型・焼成精度を生かした食器づくりを目指しました。瓦の作り方と同様、口金から押し出される土板を異なる長さに切り分け、カトラリーレストのような小物からパーティーにも対応する超長角皿まで6つの型を成型。焼締めの肌の焼きむらもあえて狙い、土味のバリエーションも実現。作家ものでも量産品でもなく、焼きものらしい表情のある、瓦のように丈夫な食器に仕上がりました。

1

2



3

(1)雨風や雪の多い地域で、50年、100年と家屋を守り続けてきた越前瓦(2)瓦の製法と同様に、粘土を型から押し出して成形し、異なる長さに切り分けていく(3)なるべく手を加えず本来の土味を活かした、焼きものらしい表情

地産地匠アワードは、地域に根ざすメーカーとデザイナーがつくる、新たなプロダクトを募集するアワードです。全国各地の風土や手仕事をいかすものづくりを発見し、販売を通じて作り手へ還元することを目指します。

ABOUT 募集概要

応募資格

地域に根ざすデザイナーと
メーカーの2者合同チーム

募集対象

日本各地の風土や
手仕事が活かされたもの
（衣食住に関わるプロダクト｜食品は対象外）

受賞後

すべての受賞商品を責任を持って販路支援

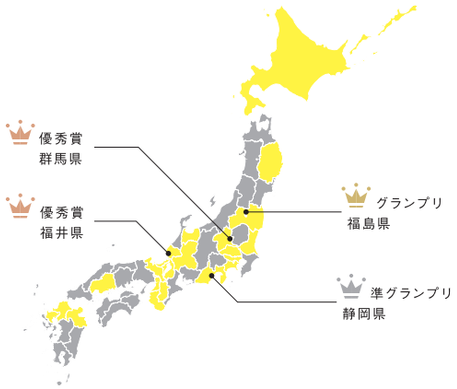
審査の重点ポイント

一、【地産】地域に根ざすメーカーが培ってきた技術や、
　その土地の文化・風習などが活かされていること
二、【地匠】産地・地域へのコミットがあること、
　産地の人たちのことを考えてデザインをしていること
三、両者が協業することで、
　新しいスタンダードとなるプロダクトの
　可能性が生み出されていること
四、継続的な生産と販売ができ、
　日本各地の使い手に届けていく志があること

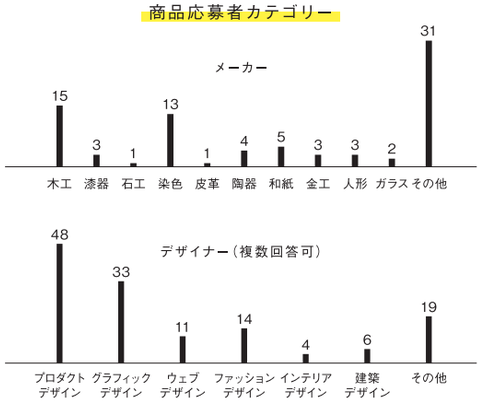
2024 AWARD 審査結果

2023年10月よりエントリーを開始し、2024年1月末日に締切。全国各地、さまざまなものづくりのチームから計80件のエントリーが集まりました。書類による一次審査を15点が通過し、6月20日・21日に実物プレゼンテーションによる最終審査を実施。グランプリ1点、準グランプリ1点、優秀賞2点が決定し、11月5日の表彰式当日より販路支援を開始しました。
中川政七商店では旗艦店とオンラインショップを中心に、受賞商品の企画展を開催。合同展示会「大日本市」への出展サポートも予定しています。

応募地域



商品応募者カテゴリー



手工業デザイナー
Oji & Design
大治 将典

他のプロダクトコンペは提案型のコンペが多い中で、本コンペは製品を継続的に生産し販売していくことを前提としたハードルの高いコンペです。当初応募が集まるかが不安でしたが、蓋を開けてみると、たくさんの面白い提案が集まりホッとしました。応募全体を見た時に、地域の問題解決や目の付け所などの「地産」の部分に光るものが多かったのですが、それをまとめるプロダクトデザインの「地匠」の部分に「後もう一歩」なものがとても多かったです。どんなに取り組みや座組が良くても、モノの魅力や使い勝手がイマイチだとやはり使い手は手に取ってくれません。プレゼンはいくらでも盛ることができますが、プロダクトそのものは嘘はつけないし盛ることはできないのです。だから、もっと地域にプロダクトデザインが必要であることを地域の人たちに認識してもらいたい。地域で工芸的分野でプロダクトデザインの仕事を続けることはとても大変です。それを応援していく取り組みとしても地産地匠を続けていきたいと思いました。

デザイナー
NOTA & design
加藤 駿介

僕は信楽が地元で、産地の中から長く日本のものづくりを見てきました。今回、東北からグランプリが出たり、惜しくも選外となったものも含めて福井に良いものが多かったりしたのは、この十数年、しっかりと種まきをしてきたからなんだなと思います。産地のものづくりがある程度の水準まで到達するためには、10年、20年という時間がかかります。今回の審査では、バブル以降の盛り上がりが一度は衰えてしまった産地で、再び地道に種まきをしてきた30年間が芽吹いてきているように感じました。これから、海外から原料を仕入れることや手で作ることの是非が問われ、結局「産地って何なんだろう？」という問いも出てくると思います。でも他の国に目を向けて見ると、地域単位の小さな集団や個人がこれだけものづくりに携わり、商品を提案できている日本はすごく稀有な存在でもある。まだまだ、日本のものづくりは捨てたものではない。そういう可能性が発見できることにも、このアワードの意義があるんじゃないかと思います。

クリエイティブディレクター
HARKEN
木本 梨絵

どこの本屋に行っても日本に関する書籍があり、他の国のことを知らない外国人がしかし日本文化のことはよく知っている。個人的な話になりますが、審査の時期の少し前に海外に移住をしたところで、ありきたりではありますが世界から見た日本の圧倒的な立ち位置をひしひし体感する渦中で皆さんのものづくりに触れる形となりました。これはもちろん今に始まった話ではなく、振り返れば19世紀後半のジャポニズムの頃から変わらず私たちはユニークであり続けている。形を変えることを恐れずに、しかし土着の思いは揺るがずに。強い意志で後世につづく屈強な美しさを追求する姿に、だから日本はいつまでも絶対的なのだと頷かされました。ここからがいよいよ始まりで、明確な販路を軸に市場と正しく繋がり広がっていくために私たち一人ひとりに何ができるのかということを考え取り組んでいきたいです。

クリエイティブディレクター
合同会社オフィスキャンプ
坂本 大祐

すべての受賞者が決まってみて、あらためてこのアワードは、ものの良し悪しを問うアワードであるとともに、そのものが生まれる背景のあり方をも問う、そんなアワードであることを再認識した。グランプリ、準グランプリともに、ものづくりの根源とも言うべき、原料のことに目を向け、それぞれの立場からみえる解を、「もの」に昇華させている。これから先もつづいていくであろうこのアワードの、大事な指針をいただいた。そんな気持ちでいる。資源やエネルギーの有限性が叫ばれるようになって久しいが、この時代において、限りあるそれらをつかってでも、つくられ、つくりつづけられるべき「もの」であるか否か？そんなことを考えずにはいられない。とはいえ、「もの」そのものが持つ楽しさは一方で十分存在意義になりえるとも思う。そんな矛盾を抱えながら、その年なりの着地点を見出せればと思う。